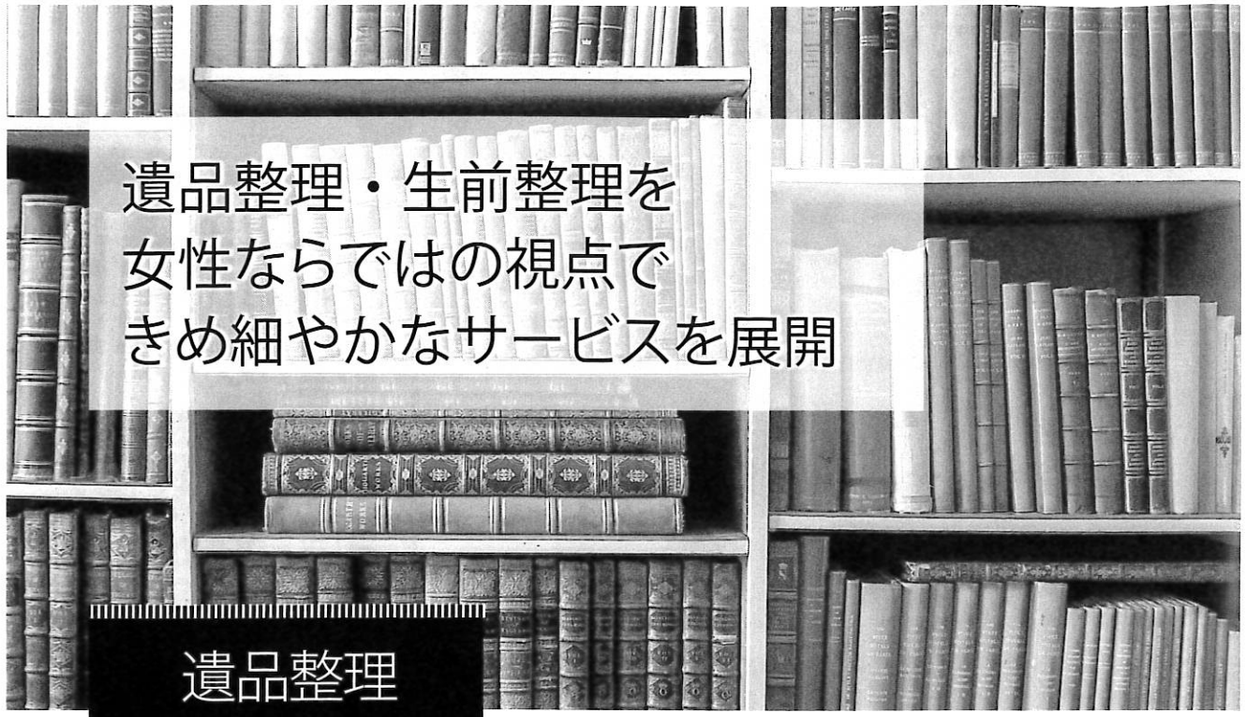

遺品整理・生前整理を女性ならではの視点できめ細やかなサービスを展開

遺品整理
One's Life
ワンズライフ

Special INTERVIEW
代表取締役 上野貴子さん

50歳を目前に遺品整理業に転身。
業界初の女性社長として注目される上野貴子さん。
設立からの6年間を見つめ直したどり着いたのは、
「故人や遺族に寄り添い、心が整う」サービスの提供

「終活」という言葉が定着して久しい。「遺される家族の負担を少しでも軽減したい」「自分自身も納得のいく終末期を迎えたい」と、健康に余裕のあるうちに家財整理の準備を進める人が増えているという。

家財整理とは一般的に「生前整理」「遺品整理」「空き家整理」など家財全般に関わる整理を意味し、なかでも死者の遺品回収や、財産の確認、清掃などを行う遺品整理の需要は年々高まり、それに関わる整理業者も増加している。

国立社会保障・人口問題研究所が発表（2019年4月）した将来推計では、2040年には世帯主が65歳以上の「高齢世帯」のうち40%が一人暮らしになると示し、東京都で45%超、道府県でも30%を超えると推測。今後も高齢者の生活を支える業態として欠かせない。

「遺品整理という概念が定着し始めたのは、ここ数年です。最初は葬祭業や清掃業、廃品不用品回収業などの業種から参入された方が多いようですが、メディアの影響もあり遺品整理の認知も広まり、依頼数は年々増えています」

こう話すのは家財整理の専門会社「ワンズライフ」（神奈川県川崎市川崎区殿町1-18-10）の代表取締役、上野貴子さんだ。

上野さんは2015年にワンズライフを設立。もともとは大手企業で秘書や人材育成などを担当してきたが、2011年の東日本大震災をきっかけに「もっと社会に貢献できる仕事をしたい」と50歳を目前に転身。業界初の女性社長として注目を浴び、マスメディアにも数多く紹介され、女性ならではの視点できめ細やかなサービスを展開している。社員全員が遺品整理士の有資格者であり、遺品査定士や終活カウンセラーなどの資格保持者もいる。遺品整理を単なる整理業、清掃業ではなく、「故人の思い出や遺族の心に寄り添う仕事」として位置付け、遺品整理を始め終活全般の相談も受け、これまで約2500件を請け負ってきた。

遺品整理にみる人生の縮図

そうしたさまざまな体験の中で、今も心に残る印象的な言葉があるという。

「『あ～もっと話を聞いておけばよかった』。ご遺族の異口同音の言葉です」

かつて自分が住んだ懐かしい実家を訪れ、親が使っていたモノを整理する。しかし、いざとなると残された遺族たちは遺品を手に心乱れることも。思い出の強さから整理や処分に踏ん切りがつかない。無理やり処分して後味の悪さに苦しむ人もいるという。そうした姿に片付けながら、故人や遺族の人生に自然と思いを巡らせてしまうと上野さんは話す。

（写真提供：ワンズライフ）

上野貴子（うわの・たかこ）

株式会社ワンズライフ代表取締役
遺品整理士／遺品査定士
社団法人終活カウンセラー協会　認定終活講師
1980年代 ソニー株式会社、株式会社マイクロソフトに 勤務。
2015年 遺品整理専門会社ワンズライフを立ち上げる。
関東初の女性遺品整理人社長。
遺品整理、生前整理を終活の一つとして社会に広く認知する活動や社会福祉協議会、地域支援包括センターなど行政と協力体制に積極的な取り組みが評価されている。

「生前整理」
本来の生前整理とは生きているうちに財産関係を整理する活動のことで、親が自分の意思で家族のために整理することを言う。将来にわたって本人が暮らしやすくし、自分がいなくなった後に、家族が困らないためにする物と情報を片づける。

「遺品整理」
本人が亡くなり周りの家族が片づけること。物の持ち主である親の意思がわからないため、「いる・いらない」の判断が難しく、遺言やエンディングノートが無い場合の整理は精神的、労力的、金銭的な負担が大きい場合がある。

「空き家整理」
空家対策特別措置法により、空家となってしまった家の残置物を整理することを指す。長年放置してきたため、家屋も家財も老朽化している場合はほぼ廃棄ゴミとなることが多い。